

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 勝方=稲福恵子(KATSUKATA-INAFUKU Keiko)・前嵩西一馬(MAETAKENISHI Kazuma)(編)『沖縄学入門：空腹の作法』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 間従文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34027

[書評]

勝方＝稲福 恵子 (KATSUKATA-INAFUKU Keiko)・
前嵩西 一馬 (MAETAKENISHI Kazuma) (編)
『沖縄学入門——空腹の作法——』
昭和堂(京都) 2010年4月 371頁

井上 間 従 文 (INOUE Mayumo)

『沖縄学入門——空腹の作法——』(勝方＝稲福恵子・前嵩西一馬編)と題されたこの論集は大学の学部生に沖縄研究の基礎的知識を伝達する教科書という体裁をとりながらも、今後、日本の大学に進むであろう沖縄研究および教育の制度化という問題に一定の批判的介入を行おうとする意欲作である。同様の問題に面してきたディシプリンとしては、アメリカ合衆国におけるエスニック・スタディーズが想起されるが、合衆国のエスニック・スタディーズが当初掲げていたアクティビズム的衝動から徐々に離れ、洗練された方法論を介したプロフェッショナル化 (professionalization = 職業化) へと向かったことはよく知られている。だが、こうした職業化と同時に問題とされるのは、エスニック・スタディーズが大学において人文社会の諸ディシプリンから隔離されながらも、それらから承認を受ける形で制度化された点にあるだろう。ウェンディ・ブラウンが「傷つけられた愛着 (wounded attachment)」と名付けたように、差別や排除といった「傷」の経験を自らの社会的批判性の立脚点として内面化を試みることは、その立脚点の正当性をマジョリティに認知してもらいたい、という承認のポリティクスへの欲望の表明でもある¹⁾。承認のポリティクスにおいて「政治」が往々にして支配者から被支配者への謝罪と再分配に帰着するならば、それは既存の支配的ヒエラルキーを補完することであり、マイノリティとされる人々が作り出されてしまう力学を、「マイノリティ問題」に収斂させることでもある。

アメリカ合衆国のエスニック・スタディーズが主に「出自」を共有すると想像される教員から学生へのイデオロギー的呼びかけ (interpellation) をとおしてこうしたアイデンティティを構築してしまうのに対して、日本本土における沖縄研究は、消費型多文化主義に慣れ親しんだ主流「日本人」オーディエンスに向けて語り、教えるという困難を経験していると想像する。従ってそこでは既知のものとしての「沖縄」の表象と、その既知のものを一部教員や学生が人種主義の枠内で代表してしまう「ネイティブ・インフォーマント」の生産を回避したかたちでの学びの空間が創出されねばならないのである。

おそらく同様の問題意識から本書の編者の一人である勝方＝稲福恵子は、沖縄を「実体論よりも関係論に基づいた視点」からまなざすことで、歴史的かつ動的に感知する方法の探究や、「構築主義的な方法意識」の徹底を目指している (ii 頁)。差別的構造に先行して沖縄や沖縄人がアプリオリに存在するのではなく、差別的構造が必然的かつ重層的に要求する主体化＝従属化の経験を沖縄にかかわる様々な人々が生きてきたとするならば、そうしたプロセスやそれへの抵抗の中に「差別的構造を解体すること」や「既存の社会構造を転覆される」ことの契機がある、とされる (ii 頁)。沖縄研究への「入門書」である本書が、同時に「空腹」状態における方法論の探求をも目指すのは、そのような理由からであろう。

本書ではまず歴史研究者たちの論考の多くに、こうした方法論的探求を見ることが出来る。こ

れら研究者たちは「琉球人」「方言論争」「反基地闘争」「集団自決」など多様なテーマを取り上げながら、「沖縄人」や「日本人」を文化的実体ではなく、権力を帯びた場において可変性を持って現れる主体化＝従属化の標識として見なす態度を共有しながら、史料と史料の外、またはある事象と他の事象を繋げる思考を行う²⁾。渡辺美季の『三人の『琉球人』——史料を読む』は、薩摩藩侵攻前後に中国や日本などの外部から琉球王国に移住した士身分者の存在に注目し、琉球王府が自らの儒教的倫理性を中国や日本に向けて強調し、これら移住者たちを「あるべき琉球人像」として回収していった際に、彼らの末裔たちがこうした言説空間を流用することによって「琉球人」というカテゴリーそのものを可変的なものとして再措定させていったプロセスを史料の精読を通して明らかにしてゆく。

戸邊秀明の『『方言論争』をたどりなおす——戦時下沖縄の文化・開発・主体性』は戦時期に柳宗悦ら民芸協会によって展開された沖縄語擁護論についての先行研究をまずは批判的に整理し、その性格と機能を単に同化政策への抵抗として称揚したり、オリエンタリスト的エキゾティシズムの発露として否定するのではなく、同時期の植民地主義的政治経済状況の中で理解することの重要性を説く。そこで重要とされるのが「擁護論」は同時期の植民地への観光ブームの中で沖縄を植民地的前近代を体現する観光地として開発することを促進する言説編成の一部であったがために、労働市場の中で「日本人」になることを追求した沖縄の人々によって批判や抵抗に合っていた事実である。観光開発を促す「擁護論」の「沖縄人」形成も、「擁護論」批判を介して強調される「日本人」になるという「自発的」な主体化＝従属化 (subjectification) も、「主体性の不在ではなく、主体性の発揮が抱えてしまう困難」の表出であったとするならば、前近代的「沖縄」/近代的「日本」という言説編成そのものをいかに批判・中断するかという問いは、本書においては我部聖の山之口模論などに引き継がれていく重要な点である (41 頁)。

では被植民者が植民地体制の中において客体形成や主体構築を強いられることで強化されていく「日本人」なるカテゴリーは沖縄との関係においていかにして批判や解体の契機にさらされてきたのか。鳥山淳による「1950年代の米軍基地問題をめぐって——日本と沖縄の関係を見ずえるために」は、沖縄現代史の方向を決定づけた「島ぐるみ闘争」に先行して日本本土各地で展開した反基地運動の過程において、アメリカの軍事的ヘゲモニーを「否応なく自らの問題として感じ取る思考回路」が存在していながらも、これらの基地が沖縄へ次々と移動する中で「沖縄の問題」として矮小化されていった経緯を解説する。米軍基地を移転させ続けることによって帝国の軍事システムを補完してしまうのではなく、沖縄と日本をある程度は横断しながら、生活に根ざした形で表明された反基地へ向けた感受性を鳥山は 1955 年ごろまでの文脈において見出す (56 頁)。

北村毅の論考『『集団自決』と沖縄戦——戦場における『国民道徳』と『従属する主体』』は、「集団自決」と一般に称されている出来事が、学者や運動家の努力もあり「強制的集団自殺」などと再命名され、それによって日本軍と日本国家の主体的責任がより明確化されたことをまずは評価する。こうした運動の文脈における命名をめぐる闘争の意義を認めながらも、北村は多くの沖縄の人々が宗主国による差別的視線にさらされたがゆえに、その国民道徳を内面化してしまい、他律的権力による強制を自発的行為の遂行として「集団死」として経験してしまったことの悲劇性とその命名の困難さを指摘する。天皇制と家父長制という二つの抑圧的体制内で主体化＝従属化を被った沖縄の多くの人々の間でこの現象は「家長に近い位置にある者による〔家族の他の構成員の〕殺害」として起きてしまった (257 頁)。その困難を引き受けた上で北村は、戦後沖縄において現れる「ぬちどうたから」などの言葉が、審美化された同一化の対象としての国家に懐疑的でありつづけ、「自己の生命の存続を第一番目に据える」思想や運動の出現を意味していたことに可能

性を見出す。

歴史研究者たちが本書で提示する主体化＝従属化の問題意識は、複数の位置にてなされる主体化への抵抗と、そうした抵抗が切り拓く異なる社会性への洞察を喚起するだろうが、そのような抵抗や創造の契機は社会運動の日常的制約から比較的自由でもある芸術表現、とりわけ沖繩においては文学において見出されるのかもしれない。朱恵石は「沖繩の『身体』を書く——戦後の沖繩の小説を考える」において大城立裕、東峰夫、又吉栄喜、目取真俊、崎山多美の代表的小説作品を読解しながら、まずは大城や東の作品が男性民族主義的視点から軍事占領の暴力にさらされる女性の身体を欠如態としての沖繩の体現として我有化する傾向にあることを批判的に論ずる。それらと対比して、又吉栄喜の『豚の報い』や崎山多美の『シマ籠る』には、植民地男性のナショナルな規範性を担保することを拒絶し、自らのセクシュアルな衝動をもって物を食べたり、匂いや音や波動を伝え合う女たちの身体を見出す。朱のこうした整理の仕方は若干図式的かもしれないが、たとえば崎山多美の小説世界には家父長制的対抗ナショナリズムをの枠組から巧みに、または軽やかに逸脱していく女性たちや、それら女性たちとの邂逅を経て、またはその傍らで、変容していく他の人々が描かれていることは確かだろう。すると重要なのは、朱が書くような「女性が…主体性を回復できるか」という問いや(185頁)、「語られる身体から、語る身体へと変化」する可能性(193頁)といった欠如から充溢への線的成長ではなく、食べ物や音などの物質に受動的に曝される受動的身体が、その経験において語る行為へと促され、身体の変形を被るような、ジュディス・バトラーであれば「意味作用をする身体/物質 (bodies that matter)」と呼ぶような行為体としての「物」をこれらの小説に読み取る作業ではないだろうか。それは当然狭義の「女性」のみの経験や動作ではなく、「物」や「身体」としてのみ扱われる様々な人々によって担われるべき受動性に基づいた行為だろう³⁾。

我部聖の「山之口猥『会話』を読む」は、山之口の作品「会話」にある「口ごもり」という顔と口を介した身体表現による既存の表象体系の一時的中断や宙吊りを行う可能性を、複数の場所や社会的位置を生きてしまっている人間たちに見出そうとする。つまり山之口の詩において本土女性から「お国は？」との問いに曝された沖繩の男性の身体が、「問いに答えようとしてもそれを言い当てる言葉が見つからず」に逡巡することときの表情の強ばりや沈黙は詩人の身体をそれまでとは違うかたちで物質化し、いわゆる「日本人」でも「沖繩人」でもないなものかをその行為そのものとして体現しているであろう。その可能性を我部は次のように過剰決定された複数の場所へと押し広げていく。「…『沖繩』と発話したとたんに『沖繩』にまつわる物語に絡めとられてしまうのは出身・性別・世代を問わず、沖繩にかかわるすべてのひとに起こりうることである。こうしたなかで、どのように沖繩を思考し、沖繩にかかわる言語を想像/創造していくのが問われている。」(175-176頁)我部の読解において山之口の「口ごもり」は、先になにか表象不可能な沖繩を実体化することなく、複数のこもる口とこわばる表情が、沖繩を共に中断し、発見していく契機である。

前高西一馬は「Teaching Okinawa——教室の窓から覗く沖繩」において植民地主義的表象体系の一部として沖繩が理解されてしまうことに危惧を表明し、そこからの離脱を人類学的フィールドワークにおける経験と認識との往復に見出す。筆者は「ネイティブへの欲望と『ネイティブがインフォーマントとしてふるまう欲望』という人種主義体制の内部における共犯関係を的確に指摘したうえで、そうした人種主義的体系からの離脱またはそれへの抵抗の手段として、社会科学的「客観性」や「共同体的伝統」という二つのドクサの「エッジ」におけるフィールドワークの経験と記述が規定の認識の枠に変更を迫る可能性を挙げる(292頁)。このようにプロセス的に知の体

系を変更することはここでは「アタマカラダ」または「超越（論）的なものと経験的なものの混在あるいは関係性」と名指されるが、これは例えばジル・ドゥルーズの著作『差異と反復』における「超越論的经验論」の問題意識とほぼ重なるように思われ、「沖繩研究」の方法論的開放性と実験性を肯定する筆者の理論的根幹を成している⁴⁾。だが前高西は超越論的经验・実証としてのフィールドワークを行う自身を「私のような native anthropologist (自文化を研究する人類学者)」として同定しまうため「ネイティブ」を要求し続ける植民地主義的学知の機制を問いに付せないばかりか(294, 321頁)、既存の認識の枠の「エッジ」にて知覚される「非常に不安定」で、「居心地の悪さを感じ」させ、「ひょっとしたら何かが宿っているかもしれない」ものは、筆者曰く「自らの共同体」の揺らぎであるからして、自他の境界線はここにおいてより強固なものとしてしまう(傍点は引用者、322頁)。さらに「自文化」という「システム」の脆弱性を暴く研究者が冒頭では「ようこそ沖繩学へ」(291頁)さらに文末では「ようこそ、沖繩へ」(322頁)と、まだそうした認識にはおそらく至ってはいないが沖繩に関心を抱く大学生たちを歓待する際に、前高西は沖繩文化の安定性ではなく不安定性を紹介する「先生」となってしまう、自らを「学生」に対しては時間的先行性を誇示する「知識人」として、そして「外部の者」に対しては空間的規範性を有する「内部の者」として対形象化した上で、ネイティブ・インフォーマントとして提示してしまうだろう。だが超越論的经验論が目指す知覚しえないものの知覚は、主体の所有物とは成りえないだけでなく、それはいわば存在に到来する出来事であるのだから、それは日常においては表象体系の只中で生活せざるを得ない多様かつ複数の人々の知覚の枠に傷を刻みこんでいるはずである。そうした複数かつ我有化不可能な傷としてこそ「エッジ=枠」があるならば、枠の限界はその限界そのものにおいて限定解除されうるはずであり、そこにこそ常に新たに回帰する「沖繩」を再感知しながら分有する複数の場があるはずである。

「沖繩学」を大学のカリキュラムに組み込むことの必要性と問題性の双方に取り組む本書は、平易な表現で知識を伝えながらも、その平易な言葉の中にそれぞれの研究者の独自の方法論や問題意識を展開する意欲的論集である。前述したように、こうした点は歴史研究や一部の文学・文化研究の筆者たちの論考に顕著である。ただ惜しむべきことは、いわゆる「伝統文化」を考察する論文の多くが、「はじめに」で勝方=稲福が述べた「沖繩そのものが創られる/たものである」という視点を離れ、「所与」とみなされる文化的事象がいかに構築されたかではなく、「所与」を歴史的過去に措定したまま、それがその後いかに失われ、受容され、流用されたかという素朴な実体論に留まっている点である。また各論考の合間に時折挿入される「コラム」には豊かな問題意識を提示するものが多く、例えば砂川秀樹による「ジェンダー/セクシュアリティの構築と越境」は「支配的な意味の配置」を疑わないままに沖繩において「男性性」や「女性性」を調査し、研究してしまう傾向に対するかなり徹底した異議申し立てとして読むことが出来る(227頁)。本書が、ある学問の領域が制度化される際に出会う可能性と危険性の双方を見つめた意欲的図書であることに変わりはなく、それが提示している問いが、沖繩の大学で今現在行われている沖繩についての研究や教育をも同様の問いに付すことは言うまでもない。

注

- 1) Brown, Wendy. *States of Injury: Power and Freedom in Late Modernity*. Princeton: Princeton University Press, 1995, Chapter 3.
- 2) 富山一郎 『近代日本社会と「沖繩人」——「日本人」になるということ』日本経済評論社、1990年、4-5頁、19-20頁。

3) Butler, Judith. *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex."* New York: Routledge, 1993, 52.

4) 「超越論的経験論」に関しては、次のようなドゥルーズの議論を参照。

「ひと〔カント〕が感覚されうるもの〔直観されうるもの〕のなかで表象＝再現前化されることのできるものに基づいて、(感覚されうるものの学としての)感性論^{エステティク}を打ち立てることができたというのは、思えば奇妙なことである。けれども確かに、表象＝再現前化から、たんに感覚されうるものを抜き取り、さらに、そのたんに感覚されうるものを、いったん表象＝再現前化が除かれた後に残るもの(たとえば、矛盾した流れ、諸感覚〔知覚〕の狂詩曲^{ラプソディー})として規定しようとするような、逆転した手続きの方がまだというわけでもない。感覚されることしか可能でないもの、感覚されうるものの存在そのもの、すなわち、差異、ポテンシャルという差異、質的に雑多なもの理由としての強度という差異、これらを、わたしたちが、感覚されうるもの^{アポステイクティック}のなかで直接に把握するとき、まことに経験論は、先験的になり、感性論は、必然的な学問の分野になる。現象が閃き、しるし^{シグニユ}として繰り広げられるのは、また、運動が「効果」として産み出されるのは、まさしく差異においてである。」ジル・ドゥルーズ、財津理 訳、『差異と反復』河出書房新社、1992年、99-100頁。

(琉球大学)